第39号
2018/08

PVかながわ ニュースレター

Information

災害時、PVへの対応について
～被災地の人々の経験に学ぶ～

近年、日本列島各地では家屋が破壊するような自然災害が頻発している。太陽電池は日が当たれば発電してしまい、制御できなくなった太陽光システムは感電や火災など2次災害の危険もある。今回は災害対応について考えてみたい。

～熊本地震等についての現地調査報告書～

2016年4月14および16日の熊本地震に対して、PV-Netは3回(4月、6月、12月)にわたる現地調査を行いNEDOに報告書を提出している。この大部な報告書から見られる被災した人々の体験は大いに教訓になる。

現地報告書を見ると、地震直後の行動として
分電盤のブレーカを落とした：18件（86%）、
分電盤のブレーカを落さなかった：3件（14%）
近所で「ブレーカを落としたか」と確認し合ったとあり、九州電力も電柱からの引込み線を切断していたと報告されている。これらは逆潮流による2次災害防止の一因となったと考えられる。

停電時の自立運転機能の活用は21件（52%）と半数を上回ったが、19件（48%）は活用せず、その内7件は機能を知らなかったとある。いざという時に備え活用方法は把握しておきたい。（これら対応を通してPVの認知度も上がったという。）

その他に注目される報告としては、

○がれきの中の放置パネルからパワコンまで、まだ電流が流れていた。
○接続箱の位置が問題、ブレーカの切り易さを今後設置時に考えるべき。
○PV設置家屋は屋根加重により倒壊に強いという推論は2011年の東日本大地震でも経験則としてあったが、今回のもそのように体感した。

～災害被害時の太陽光発電システム留意点～

太陽光発電協会は「倒壊の恐れ」と「倒壊した」システムに分け、注意喚起を行っている。
〔参照http://www.jpea.gr.jp/pdf/180619.pdf〕

★倒壊の恐れのある家屋の場合は、必ず分電盤のブレーカを切りパワーコンディショナーの運転ボタンを停止したうえで避難する。
破壊散乱しているシステムは日が当たると電流が流れるので最も注意しなければならない。
★遮光シートや段ボールなどで被うか、裏返す。
★素手や、濡れた手袋のまま触らない。
★複数のパネルが配線でつながっている場合は配線コネクタを全て抜き、配線を切断（切断は電気工事士が行う）、切断面から銅線が剥き出しにならないよう絶縁テープで巻いておく。
★水害の場合、水没・浸水の機器には、接近接触すると感電の恐れがあるので注意。

（横谷記）

世話人から

報告事項

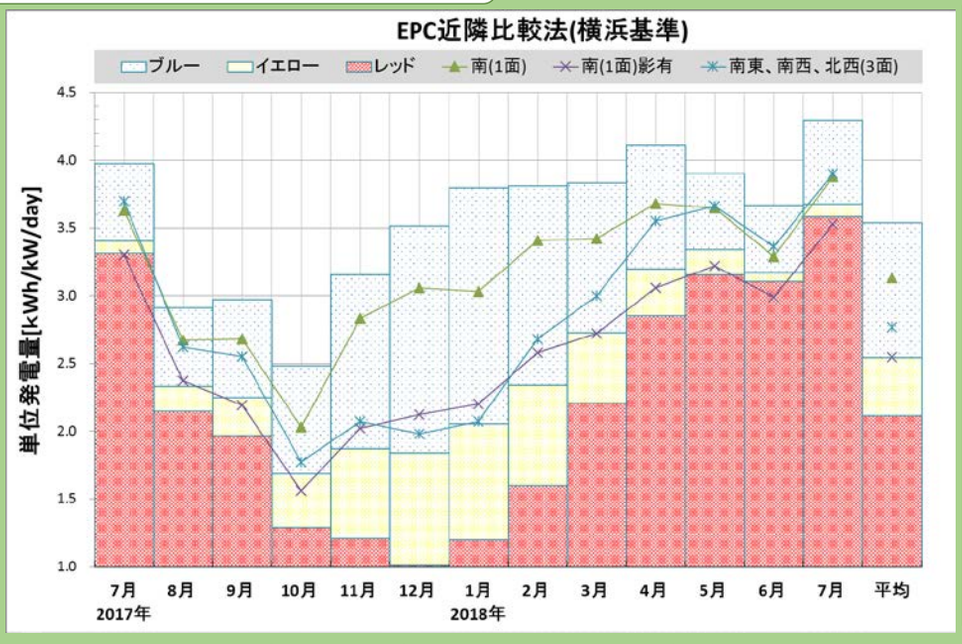
PV-Net 2018年通常総会
7月29日（日）に開催された。
出席者45名、委任状525名で成立、全議案は提案通り承認された。認定NPOに関わる定款が一部改訂された。終了後、①小林光氏（評議員）、②酒井直樹氏（電力シェアリング代表取締役）二氏の講演が行われた。

今後の予定

1. 2018年8月12日（日）
青少年のための**「科学の祭典」**
会場：県立青少年センター
時間:10:00～15:30

2. 2018年9月16日（日）
ワークショップ第24回
「出前発電所をつくろう！」
会場：「かるがも」(星川駅)
時間：13:40～16:30

今月の単位発電量！



横浜の7月の日照時間は258.7hで最近の10年で最長でした。気象庁によると7月は、「太平洋高気圧の勢力が日本付近で強く、北・東・西日本では月平均気温がかなり高くなり、東日本では 7 月として1946 年の統計開始以来第 1 位の高温となった。23 日には熊谷（埼玉県）で日最高気温が 41.1℃となり、歴代全国 1 位を更新した。梅雨前線や台風 7 号の影響で、西日本を中心に全国的に記録的な大雨となり、「平成 30 年 7 月豪雨」が発生した一方、太平洋高気圧に覆われ晴れた日が多く、東日本日本海側の月間日照時間は、7 月として1946 年の統計開始以来第 1 位の多照となった。」

単位発電量とは、1kWあたり、1日あたりの平均発電量です。毎月の発電量[kWh]を設備容量[kW]と日数で割ってください。平均は直近12か月の単位発電量です。一般的に単位発電量は、ブルーの範囲になることが期待されます。北西など、やや北向きがある発電所はイエローになることもありますが、レッドが続く場合は、メーカなどに相談することをお勧めします。